

平成 25 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

家族による入院時からの自主練習の介入頻度が脳卒中
片麻痺患者の在宅生活と家族の介護負担に及ぼす影響

学位の種類: 修士 (理学療法 学)

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 理学療法科学域

学修番号 12895606

氏名: 平野 恵健

(指導教員名: 池田 誠 教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (欧文の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 枚 (A 4 版) 程度とする。

論文要旨

本研究は、脳卒中片麻痺患者の家族による自主練習の介入が、在宅復帰後の身体機能、移乗・移動能力、日常生活活動 (ADL) や家族の介護負担に及ぼす影響を検証した。対象は、初回発症の脳卒中患者で、入院時に中等度以上の下肢麻痺を有し、在宅復帰した 30 名とした。対象者を入院中に通常のリハビリ時間以外に理学療法士による指導及び監視下のもと家族が自主練習に参加した 1 週間あたりの参加頻度の頻度中央値を算出し、中央値を上回った群 (高頻度群) と中央値を下回った群 (低頻度群) に分類し、患者背景、身体機能、移乗・移動能力、ADL の変化及び群間で比較検討した。次に家族に対し入院患者の病状の理解度、各自主練習の介助習得度、入院・退院時・退院後の介護不安度、家族背景を比較検討した。その結果、患者背景において、年齢、同居家族数、発症から入院までの日数、退院から調査までの日数、総練習単位数、PT 単位数に 2 群間で有意な差を認めず、在院日数で高頻度群は低頻度に比べて有意に短かった。自主練習における患者の意欲で、高頻度群は低頻度群に比べて有意に高値であった。入・退院時・退院後の下肢 BRS、FRT、TUG、6 分間歩行は 2 群間で有意な差を認めず、退院後の非麻痺側下肢筋力で、高頻度群は低頻度群に比べて有意に高値であった。BI 利得は 2 群間で有意な差を認めず、BI 効率で、高頻度群は低頻度群に比べて有意に高値であった。退院後の RMI の変化は 2 群間で有意な差を認めず、退院後の BI の変化で、高頻度群は低頻度群に比べて有意に向上していた。自主練習における家族の病状の理解度で、高頻度群は低頻度群に比べて有意に高値であった。自主練習の各運動項目の介助技術の習得度は、移乗・階段昇降において 2 群間で有意な差を認めず、起立・歩行で、高頻度群は低頻度群に比べて有意に高値であった。入・退院時・退院後の家族の不安度で、入院時は 2 群間で有意な差を認めず、退院時・退院後で高頻度群は低頻度群に比べて有意に高値であった。家族背景において、介護者の病歴または通院の有無、就労の有無、車の運転の有無、車の所有の有無、交通手段、当院から自宅までの距離、自主練習に参加した家族の続柄において 2 群間で有意な差は認められなかった。以上の結果から、入院中から高頻度で実践的な自主練習を実施することで、早期に ADL の向上と在宅復帰が可能となり、また、早期に獲得できた運動機能や ADL を退院後も継続して維持・向上できることが示唆された。また、高頻度群の家族は、入院中の患者の病状理解度を促進し、退院時・退院後の介護不安の軽減に期待ができることが示唆された。